

短歌の齒ごたえ 駒田晶子

去年、福島市にある福島県立福島高校で、短歌の話を見せて頂く機会があった。待合室で、女性の国語教師と雑談していたこと。この福高（地元の人は、こう呼ぶ）出身の男の子が、何年前かに角川短歌賞を受賞したんですよ、と言う。あ、そうなんですか、すみません、知りませんでした、とわたしは慌てた。福高生の頃から短歌を作っていたのですか？と質問したら、ええ、何だかおもしろい冊子を作っていましたよ、ちよつと、この子はちがうな、と思うような、という答えだった。昨年末、吉田隼人『忘却のための試論』（書肆侃侃房）がポストに届き、ああ、この人のことだったのだな、とページをめくった。

・きまづさのきはみのはてに聴こゆるはほろびほころびほろほろ
時雨

・きがくるふほどねむいんだ 人ごみをわけて驟雨のなかへでて
ゆく

・鶺鴒は飛ばずに駆ける あさなな夢の論理の途絶えむあたり
一冊は「二〇一一年」「二〇一二年以前」「二〇一一年以後」の
三部に章立てされている。作者にとって「二〇一一年」とは、何
だったのか。それは、一冊を読めば簡単に把握できるか、と言え
ば、そうでもない。前三首は、二〇一三年第五十九回角川短歌賞
受賞作から。受賞時に掲載された五十首は、一首削っただけ、し

かも、数か所を手直したのみの形で、歌集に収められている。
・はみだせど鼻毛のやうには切れぬゆゑ被害者づらを冬陽にさら
す

・永遠は海より盆地の稜線さ溶けゆく太陽だべよ、ランボオ
作者が生まれ育った福島のことを詠っている、と直接に思える
作品は少ない。二首目は、盆地である故郷の、福島の日没だろう。
・つなぐ手をもたぬ少女が手をつなぐ相手をもたぬ少年とゐる
・ねえさんの蝶々結びは縦になり生るまへから落ちかける蝶
・はたらいてゐないわたしが砂浜に承認されてながむる夕陽
・霊といふ字のなかに降る雨音をききわくるとき目をほそめたり
・青馬のゆげ立つる冬さいはひのきはみとはつね天折ならむ
・うつそみのきみよりゆめにみしきみのからめくる舌しふねかり
しよ

・ほろびるね、ほろびるよ、とぞいひあへるゆめのきしべにあな
うらひたし

・べるそな を しづかにはづしひためんのわれにふくなる 崖
のしほかせ

短歌形式との相性の良さを感じる。言葉への好奇心やこだわり
が強いのだろう。二十代には少数派の、旧仮名遣いだ。古語を引
き出してきて、使ってみせたり。歌集終盤は、書き下ろしとして、
平仮名ばかりの作品を並べてあった。いろいろ試みている。

歌壇一月号「ノベタ世代の短歌観」に、柴田典昭氏、谷岡亜
紀氏の両氏が、今の短歌の〈私〉について、近代短歌「自我の詩」
や、和歌革新運動を引き寄せながら考えていた。さまざまな世代
から『忘却のための試論』がどう読まれるのか、楽しみに思う。